

梶山女学園大学

梶山歴史文化館の展示改善に関する研究報告

著者	見田 隆鑑
雑誌名	文化情報学部紀要
号	19
ページ	15-26
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.20557/00002810

梶山歴史文化館の展示改善に関する研究報告

見 田 隆 鑑

はじめに

梶山歴史文化館¹⁾は、平成21年6月に、梶山女学園の創設者である梶山正式^{すきやまさかず}（1879-1964）の生誕130周年を記念して設立された施設である。施設は、星が丘キャンパスの大学図書館4階と5階にあるが、その一部には学園が大正13年に新設した山添町の校舎に建てられた金剛塔の一部が移設復元されており、その内部も展示室として利用されている。

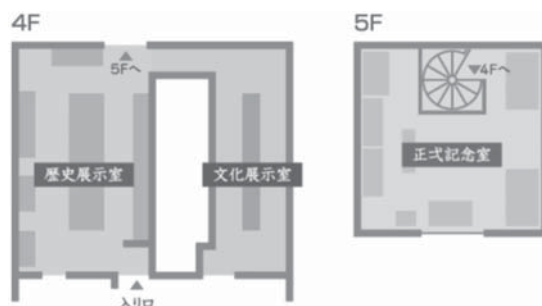
梶山歴史文化館の設立の主旨は、

1. 学園の歴史を日本（世界）の歴史の中に位置づけて紹介する
2. 学園の教育理念をアピールする
3. 学園の基礎を築いてきた生徒・教職員の活動を紹介する
4. 創設者の足跡と人を紹介する
5. 学園に関係する人々の文化の交流ができる場とする

の5つが掲げられており、1. 2. 3. については、館内の歴史展示室で、4. については旧金剛塔内にある正式記念室で、3. 5. については文化展示室で、その主旨に沿った展示が行われている。

一般的な博物館の展示室の構成で言うと、歴史展示室と正式記念室が常設展示室、文化展示室が企画展示室ということになる。【図1参照】

4階の歴史展示室では、学園章、「梶」という文字、金剛鐘、人間橋、糸菊、学園の制服、裁縫



【図1】 梶山歴史文化館の施設図（HPより）

雛形、過去の教材、オリンピック（前畑秀子）、戦争と学園、創設年である明治38年という年について、梶山正式の自筆文書などいくつかのテーマが設けられ、解説パネルを通してそれぞれの説明がなされるとともに、豊富な資料を陳列する形でその具体的な足跡を来館者に見せていく展示になっている。また、文化展示室では年数回、様々なテーマでの企画展が実施されている。

螺旋階段を上った5階の正式記念室では、創設者・梶山正式とその妻・今子^{いまこ}の足跡や人となり、夫妻の生活を紹介する資料が展示され、それぞれに関する解説がなされている。

梶山歴史文化館は、毎週水曜日と金曜日の10:00～17:00に開館されており、全学部共通の必修科目である「人間論」や、1年生向けの「ファーストイヤーゼミ」をはじめ、学内の様々な授業でも利用される施設である。

筆者は、平成24年に梶山女学園大学文化情報学部に着任し、特に学芸員課程に関わる教員として採用されたこともあり、着任時から梶山歴史文

化館の専門委員となり、また自身の担当する「博物館概論」など学芸員課程の授業の中で相山歴史文化館と関わってきた。

特に、「博物館概論」の授業では、授業の中で相山歴史文化館を訪れ、学生の視点による常設展示の展示評価を毎年実施してきた。学生からの声には様々なものがあるが、毎年意見をもらっている以上、何かしら目に見える形で改善を行えないものかと考え、平成29年度と平成30年度に相山女学園大学学園研究費助成金（B）²⁾に申請し、その予算をもとに可能な範囲で展示改善を実施してみた。本稿は、その記録および報告として執筆するものである。

1. 学生たちから展示改善の声

「博物館概論」の授業は、毎年前期に2クラスを担当しており³⁾、この科目は学芸員課程の科目である他、特に文化情報学科では学科の専門教育科目としても設定されていることから、資格取得希望者に加え、それ以外の学生を含めると毎年100～120名くらいの受講者がいる。

筆者が実施している常設展示の展示評価では、相山歴史文化館の展示を観覧し、その中で印象に残った展示物や展示方法に改善が必要と思われるもの、来館者が増えるような展示改善案などにつ

いて問いを設定し、展示を見学しながらワークシートに回答(すべて記述式)してもらう形を取っている【図2】。回答には好意的なものから、そうでないものまで様々な意見が毎年寄せられるが、学生からの指摘は利用者の視点として妥当なもので、そこから気付かされる点も多くある。

相山歴史文化館を魅力ある施設にする為に追加する必要がある展示物や体験内容のアイデアには、例えば、昔の型紙を使った裁縫体験（ワークショップ）の実施⁴⁾や、校舎の模型の設置、相山女学園の好きなどところを利用者が書き込んでいくノートの設置、VRを使った体験、歴代の相山生の中で流行したものや思い出話の紹介、相山女学園の行事の紹介、相山女学園の歴史を知っている人から話を聞くことができるイベントの開催など、様々な意見が寄せられてきた。

数年間の展示評価で得られた改善点のすべてに筆者が対応できているわけではないが、コメントの中であげられていた2点について、特に対応を試みようとするに至った。

まず1点目は、“正式記念室の場所が分かりにくい”、“記念室にあがる螺旋階段が怖い・危ない”というコメントに対しての改善である。

先に記したように、正式記念室は、大正時代に建てられた旧金剛塔を移設復元して展示室になっている場所である。この展示室は、「創設者の足跡と人」を伝えることを主旨とする展示室で、学園の背景、特に創設者の人となりを知ってもらう上でも非常に重要な意味を持つ場所である。その場所が分かりにくい、足を運びにくいという印象で終わってしまうのは問題があると感じた。

利用者がこの場所に意識を向けやすくするような対応、また4階の歴史展示室のフロアから螺旋階段を上って、その上階にある正式記念室に行ってみようという動機付けにつながるような誘導方法が必要であろうと考えた。

もう1点は、「展示されている資料に直接触れたい」という意見である。歴史展示室には、学園



【図2】 学生による展示評価の様子

の歴代の制服の展示や、これまで学園で刊行されてきた雑誌『糸菊』の表紙が総覧できるような展示がされている【図3】。学生からは、「学園の昔の制服を実際に着てみたい」というコメントや、「昔の『糸菊』を実際に手に取って読んでみたい」、「日誌や本を手に取って読めるようにしてほしい」といったコメントが、改善して欲しい展示方法や、利用者がより楽しめるようになる展示の改善点としてあげられていた。



【図3】歴史展示室内の『糸菊』の展示

『糸菊』については、過去にすべてデジタル化(PDF化)されており、そのデータを展示室内に設置された2台のi-padで閲覧できる形になっている【図4】が、単に『糸菊』の中身を見たいということだけではなく、学生は昔の冊子を直接手



【図4】歴史展示室内に設置されたi-pad

に取ってみることに何らかの価値を感じているように思われた。

歴史展示室には、学園創設の明治38年と関連付けた「38年ボックス」という展示ケースがあり、その中には明治38年に製造された「三八銃」^{さんぱちじゅう}も資料として展示されているが、この銃に触りたいというコメントはこの8年間では一度もなく、「資料に直接触れたい」とは言ってもその対象は何でもよいというわけでもないようである。

2. 正式記念室の改善

まず、平成29年度に実施した正式記念室の展示改善について報告する。

正式記念室の場所が分かりにくい、記念室にある螺旋階段が怖い、あるいは危ないという指摘は、筆者が学生による展示評価をはじめた初年度から既に見られたものであった。このうち、螺旋階段の改善については、大学の施設・設備のそのものの改善に関わるものであり、筆者個人で対応する内容ではなく、対応が困難な案件である。また、本学は女子大学であることから、学生の履いている靴の形状によっては確かにこうした階段が「危ない」と感じることもあるように思われる。

設置時に螺旋階段【図5】が選択された背景は不明だが、現在の山添キャンパスにある金剛塔も金剛鐘を演奏する鍵盤がある場所まで上がって行くのに、螺旋状の階段を上る形を取っていることから、その構造とも関係があるのかもしれない。また、仮に通常の階段にした場合には、傾斜角度がかなり急になることから、現状の螺旋階段の方が上りやすく、また安全ではあると考えられる。

では、具体的にどのような改善を加えるかという点で、この旧金剛塔の本来の機能を背景とする誘導方法を考えた。

移設復元された旧金剛塔は、現在も山添キャンパスで使用されている金剛鐘が最初に設置された



【図5】正式記念室への螺旋階

建物で、現在の正式記念室の天井部には現在山添キャンパスの金剛塔に設置されている10個の鐘（カリヨン）が設置されていた。しかし、そのことを認識している学生は多くないように思われる。特に大学キャンパスでは、毎朝9時7分に放送で金剛鐘の奏鳴をかけているが、実際の金剛鐘は大学キャンパス内には存在しない。

金剛鐘は、現在もオリジナルの鐘を使用して山添キャンパスで毎朝演奏されているが、中学・高等学校でも演奏できる生徒は限られている（※演奏は2名の生徒で行う）ことから、併設校である相山女学園高等学校から進学してきた学生でも、金剛鐘の具体的な構造や、その演奏の実際についてはあまりよく分かっていない場合も多い。特に、他校から入学してきた学生にとっては、金剛鐘そのものの理解は十分ではなく、また併設校の学生に比べると特段の思い入れも薄いものと思われる。

平成29年度に、筆者の「デジタルアーカイブ論」の授業の中で、文化情報学科の2年生（65名）に金剛鐘の理解についてのアンケートを実施したことがあるが、「金剛鐘について知っていることを記述してください」という設問について、31名の学生から何かしらの回答があったが、その他の

34名の学生は無回答、もしくは分からない、思いつかないという回答であった。また、回答には“朝鳴っている鐘”という主旨のものが最も多く、大学での自校史教育の中で学んだと思われる金剛鐘の歴史（例えば戦時中に供出を免れた話など）に関する回答も若干あったが、中には“奈良時代くらいからあるもの”というようなかなり誤った認識による回答も見られた。

また、「金剛鐘の音を意識して聞いたことがあるか」という設問については、ある16名、ない48名、無回答1名であった。また、「金剛鐘の演奏方法を知っているか」という設問については、知っているが13名、知らないが51名、無回答が1名であった。

このアンケートで全学生の状況が分かるわけではないが、在学生が学生生活の中で特別この鐘の存在を意識しているわけでもないことは窺えるのではないだろうか。

筆者自身も、着任時から学園の中で金剛鐘やその奏鳴に特別な意義があることは感じていたものの、パネル制作用の写真撮影の為に金剛塔内で生徒が実際に演奏する姿を見る機会を得るまでは、1名の生徒が鍵盤を操作し、1名の生徒が手拍子でリズムを取る演奏方法⁵⁾や、金剛鐘（カリヨン）そのものの構造についても十分な理解には及んでいなかった。

筆者が金剛鐘について改めて意識を持ったのは、平成29年1月に相山歴史文化館が山添キャンパスで開催したベルギー在住のカリヨン奏者・松江万里子氏による講演を聴講したことに始まる。その講演会は、カリヨンの歴史についての説明を受け、実際の演奏の様子を動画で見るといった内容であったと記憶しているが、筆者はカリヨン（＝相山女学園においては「金剛鐘」と呼ばれている鐘）という楽器が、ベルギーを発祥としてヨーロッパ、そしてアメリカへと伝播し、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校を訪れた際にカリヨン塔からの奏鳴を聞いた創設者・相山正式が、本

学園の教育の中にそれを取り入れたいと感じ、名古屋の永和堂楽器店を通してイギリスのジレット & ジョンストン社から購入したという流れに、「カリヨン」という楽器が人々の心を引きつけた音の力や、その普遍性に非常に面白さを感じた。

相山歴史文化館の設立の主旨にも、「学園の歴史を日本（世界）の歴史の中に位置づけて紹介する」という内容が含まれているが、まさに金剛鐘は、そのルーツを辿ることを通してヨーロッパの文化と繋がるのが可能な貴重な遺産であることも感じた。

金剛鐘については、既に相山歴史文化館館長・相山美恵子氏が『糸菊』の説苑の中で詳しくまとめられている⁶⁾ので、ここでは省略するが、金剛鐘は日本に残るカリヨンとしても最も古い作例である可能性があり、また現在もその鐘が生徒たちによって毎朝演奏され続けていることも稀有な事例のようである。その価値は今後、研究が進められる中でより高まっていくものと考えられる。また、相山美恵子氏が「金剛鐘」を学園の象徴としてだけでなく世界の歴史の中で捉え直し、グローバルな視点でその価値を考えてみるのも興味深いのではないか」という言葉を先の説苑の中で書き記されている。

こうした背景もあり、学園の歴史の中で意義を持つ「金剛鐘」への理解を深めることを、正式記念室への誘導にも繋げられる方法がよいのではないかと考えた。

では、具体的にどのような形で改善を実施したのかをまとめたい。検討段階では、金剛鐘あるいはその鍵盤のレプリカ、金剛鐘の構造を説明する模型の製作など、立体的な二次資料の製作を考えていたが、30万円という予算内で製作することが難しいことが業者に見積もりを取る中で明らかとなった。また、鍵盤部分については、実査を通してその構造を理解できたことから、資材を調達し、筆者自身で模型を制作することも考えたが、そうした行程も予算執行の手続き上、様々な障害

があることが分かり断念した。

学生のコメントにも金剛鐘を鳴らす体験や、ミニ金剛鐘の設置というものがあげられていたが、こうした立体的な二次資料の製作には相応の予算が必要である。

結果的に、立体模型の製作に関して見積もりを依頼していたナカシャクリエテブ株式会社の営業スタッフと筆者が相談する中で、“金剛鐘の姿、仕組みや鍵盤を演奏する様子はパネル展示でも伝わるのではないか”という提案を受け、また展示室内で検討した際に“4階の螺旋階段下に演奏の様子を紹介するパネルを設置し、上階の正式記念室の天井部に金剛鐘のパネルを設置することで、金剛鐘の解説を通し下階から上階への誘導が可能となり、また、螺旋階段下のパネル（生徒が鍵盤を操作している姿）を正式記念室への入り口の扉からちょうど見える位置に設置することを通して、奥の部屋に意識を引きつける一つのサインの機能を持つようになるのではないか”というアイデアも得ることができた。【図6、7】このことは、ちょうど今回の改善主旨とも繋がるものであった。

また、現在の山添キャンパスの金剛塔内での金剛鐘と鍵盤の位置関係も、上階と下階の差が存在しており、2つのパネルの距離関係は実際の金剛塔内での鐘と演奏者の位置関係とも呼応したもの



【図6】正式記念室に設置した金剛鐘のパネル



【図7】正式記念室入り口に設置したパネル

でもある。

2つのパネルは、長期的に設置されることを想定し、温湿度の変化に伴う湾曲など変形の少ない素材、パネルに使用している写真の退色や劣化が少ない印刷方法を条件として製作したことから、製作費用および設置費用には、23万ほどの予算が必要となった。

金剛鐘の構造を解説するパネルについては、修正が必要な部分も出てくる可能性があることから、筆者がイラストをはじめ印刷用の原稿を作成し、kinko'sに依頼し、プラスチックのパネルに印刷したものを設置した。こちらは比較的安価で



【図8】「金剛鐘の仕組み」の解説パネル

二千円弱で制作することができた。現在は、パネルの裏面にマグネットシートを貼り、正式記念室入り口の扉に貼り付けてある【図8】。

これらの写真パネルと解説パネルの設置に加えて、金剛鐘のパネルが設置された正式記念室には、一万円弱で購入可能な音声POP⁷⁾ (GREEN HOUSE GH-EPVB-WH)【図9】を設置し、「金剛石」の演奏⁸⁾が常時聞こえるようにした。この音は下階から螺旋階段を上がってくる際に微かに聞こえるくらいで常時リピート再生している。当初は、音声POPの人感センサーを利用して、人が来た時だけ音を鳴らすことを想定してこの装置を購入したが、人感センサーの機能は挿入したSDカードの音源を流す場合には機能しないようである。



【図9】正式記念室に設置した音声POP

音が展示室内に常時鳴っていることについては、しばしば観覧上のノイズとなることがあるが、“静かな空間で鐘がなっていることが怖い”という主旨のコメントを1件確認しているが、記念室の展示の観覧の邪魔となるというコメントは現状では確認できていない。

また、金剛鐘とは関係ないが、正式記念室の入り口に、創設者・相山正式の等身大パネル【図10】も設置した。“正式記念室に相山正式の人形を置く”という提案も学生の提案の中にあったが、今回は記念室ではなく入り口に置くこととした。このパネルは、相山正式という人物の雰囲気や、実際の背丈のイメージを来館者に持ってもらうとともに、人物像が右を向いた写真を使用したこと



【図10】創設者の等身大パネル

から、矢印(←)とは異なる一つのサインとして、利用者の意識を正式記念室の方に向ける効果を意識したものである。このパネルは、相山歴史文化館から提供を受けた写真データをもとに、kinko'sに加工・印刷を依頼したものだが、比較的安価で製作することが可能であった。

この他、金剛鐘の歴史に関わる資料として、金剛鐘をイギリスから輸入した名古屋の永和堂楽器店の当時の所在地（名古屋市中区南大津通6丁目（上前津電停北））が分かる資料（昭和14年元旦に永和堂楽器店が顧客に出した年賀状）【図11】や永和堂楽器店が発行した『ピアノの話』という小冊子を私的に購入したものを相山歴史文化館に寄贈した⁹⁾。また、イギリスのジレット&ジョンストン社にも何か輸出時の記録がないかメールで質問を送ってみたが、こちらについては現在のところ回答を得られていない状況である。以上が、1つ目の課題である「正式記念室」の改善として実施した内容である。



【図11】永和堂の年賀状（昭和14年）

3. 体験型資料の設置

次に、平成30年度に実施した体験型資料の設置について報告する。

(1) 明治期の制服、大正～昭和初期の制服の体験型展示資料の制作

展示評価のワークシートの中で、歴史文化館に設置して欲しい展示内容としてコメントが多くみられたものに、実際に着られる体験用の制服の設置があった。

現在、展示してある学園の制服【図12】のうち、明治期の制服、大正～昭和初期の制服は実際に使用されていたものではなく、明治期の制服は袴の裾に黒の布テープで山型の連続模様を貼り付けたものであり、大正～昭和初期の制服は過去の写真資料を参考に制作されたものがある。いずれも、過去に生活科学部の教員・学生によって制作されたものである。

学生からは具体的にどの制服を着たいというコメントはなかったが、幼稚園や小学校の制服は大



【図12】歴史展示室の制服の展示

学生が着るにはサイズのにも困難であり、現在の中・高校生の制服（展示してあるものは現行の制服よりは古い型のようなものである）も特に今回新たに制作する資料でもないであろうと考え、明治期と大正期の制服を、体験型資料の制作対象として選定した。

制服の体験も、各自のスマートフォンを利用して体験できるようなデジタルコンテンツを制作する案や、顔埋めパネルを設置するなどの案もあったが、実際に体験用の衣装を製作した方が安価で済むのではないかと結論に至り、利用者が服を着たままで、その上から着用できる構造で作られた体験用の制服を製作し、設置することにした【図13】。



【図13】歴史展示室に設置した体験用の制服

こうした体験型の衣装の利用は、有料ではあるが、近隣の博物館では博物館明治村や野外民族博物館リトルワールドでも実施されている。また、特別展の展示に関連した衣装を着用して記念撮影ができるブースも、名古屋ボストン美術館（閉館）や名古屋市美術館での展覧会でも取り入れられており、近年は博物館での特別展・企画展の機会に記念撮影を意識した撮影スポットや撮影時に利用できる衣装やアイテムの提供も増えてきているように感じられる。こうした撮影スポットの設置はSNSを通じた展覧会の広報とも関わるものである。

大正～昭和初期の制服に関しては、実物も型紙も存在しないことから、製作にあたっては、筆者が現在展示されている制服を多方向から撮影した写真を準備し、また製作の主旨や、どのような構造で製作して欲しいのかを製作者に口頭で伝える形で業者に依頼した。今回、製作にあたっては大塚屋のオーダーメイドフロアの志水氏をお願いすることになり、製作の主旨を理解してもらった上で、1着の試作品【図14】を製作してもらい、それをもとにいくつか改善箇所を相談しながら、現在利用されている2着の体験用制服が完成した。



【図14】大正～昭和初期の制服（試作品）

大正～昭和初期の制服は、セーラーカラーのブラウスとジャンパースカートを組み合わせたデザインで、その双方を取り入れている点が非常に面白いと感じた。体験用の制服は、ブラウスとジャ

ンパースカートが一体となっており、背面が割れて割烹着のように袖を通して服の上から着用してもらい、背中の面ファスナーを留めことで実際にセーラーカラーのブラウスとジャンパースカートの制服を着用したように見えるようになっている。今回、同じものを2着製作したが、1着の製作費用は約6万円であった。次に、明治期の制服については、先の大正～昭和初期の制服のように生地から製作していくのは無駄に費用がかかることから、大須にあるアンティーク着物店を訪れ、時代性を考慮した無難な柄の着物（※ただし明治期の着物ではない）と海老茶色の袴を購入する形を取った。

明治期の制服のポイントは、袴の裾の黒い山型の連続模様であり、このラインが入っていることが、椋山裁縫女学校に通う生徒であることを示すものであった。当時も、着物や袴は生徒が所有していたものを着用しており、重要なのは校章の代わりをなすこの黒いラインであった。

購入した袴に黒い布テープのラインを貼り付ける作業は、筆者の「博物館資料論」の授業の中で、受講学生に作業してもらうことにした【図15】。また、この際に、学生には椋山の過去の制服の歴史について講義するとともに、特に体験用の明治期の制服を設置するにあたって、どのような工夫をしたらこの制服を着用してみたいと思うかななどをアンケートに回答してもらった。



【図15】袴に黒いラインを貼り付ける学生

その回答では、大正～昭和初期の制服のように面ファスナーで簡単に脱ぎ着ができるというのが理想的ではあるようだが、筆者自身でその作業を行うことはかなり困難に感じた為、結果的には普通に服の上から着物と袴を着用してもらう形に現在はなっている。ただし、半幅帯については、学生からの指摘を参考に、「作り帯」とし、さらに面ファスナーで着脱できる形にした【図16】。現状の作り帯は、筆者が書籍を参考に市販の半幅帯を加工して製作したものである為、将来機会があれば専門的な知識を持った方に改良版を製作してもらいたいと考えている。



【図16】半幅の作り帯（筆者作）

また、着物も通常の長さではお端折りが面倒な為、腰くらいの長さで裁断した。実際に着用してもらうと、外観としては違和感なく当時の女学生の雰囲気再現できているように思われる。

着用にあたっては、一人で着用するのは難しいことから、現在も椋山歴史文化館のスタッフが補助しながら試着してもらっており、手間はかかるものの、そうした機会にスタッフと利用者の対話が生まれている点は良い効果もあるのではないかと感じている。

体験用制服の利用の様子を見ている限り、大正～昭和初期の制服よりも明治期の制服の試着を希望する学生が若干多いように思われる。現在、着物や袴は、成人式や卒業式の機会くらいしか着

る機会がない衣装であることも、その選択の背景にはあるように思われる。

また、大正～昭和初期の制服は、デザイン自体は古風なもの、学生自身が中高生の頃に着た制服と大きく異なるものでもないことから、大学生がこうした制服を着ることが少し気恥ずかしいということで、体験を躊躇う部分もあるように感じられた。

この体験型の展示資料は、授業等で歴史文化館を訪れる学生だけでなく、女性の事務職員やOGの訪問者も利用しているようであり、オープンキャンパスや大学祭などのイベント時に椋山歴史文化館を開放した際に見学を訪れた利用者也試着をして記念撮影をして帰っているようである。

この制服の体験については、本学文化情報学部メディア情報学科の柘窪研究室で映像作品も制作されており、YouTubeに公開されている¹⁰⁾。

(2) 触れる展示の設置

学生からのコメントの中には、過去に刊行された『糸菊』や日誌などを手に取ってみたいというものが見られた。歴代の『糸菊』の表紙が総覧できる形でディスプレイされている展示がある【図3参照】ことから、利用者としては気になった冊子を手に取ってみたいということのように思われる。

先にも記したように、過去の『糸菊』については、PDF化されたものが歴史展示室に設置された2台のi-padで閲覧できるようになっている。そのことが十分に伝わっていない可能性もあるかもしれないが、データとして内容を見てみたいということではなく、“冊子を手に取り、開いて見る”という行為に意欲があるように感じられた。このことは、電子書籍よりも紙の書籍の方を好む人の心理とも近いのかもしれない。

ただ、展示してある『糸菊』を誰でも触れるようにしてしまうと、資料そのものを傷めてしまう可能性が高いことから、古書店で販売されている

過去の『糸菊』を購入する形で新たに資料を収集し、それらについては触れる展示用の資料として展示することにした。

また、今回、古書の収集過程では、『糸菊』に限らず、過去の卒業アルバムなど学園に関わる資料で市場に販売されているものが色々見つかったことから、それらも収集対象とし、触れる展示資料に加えることにした【図17参照】。



【図17】歴史展示室の資料閲覧コーナー

その中には、学園の刊行物だけではなく、先の大正～昭和初期の制服の体験型展示と関連させる形で、学園の制服が制定された大正15年に刊行された少女雑誌なども収集し、当時の女学生たちが目にしていたと思われる雑誌も手に取って見られるようにした。学生からの展示改善案の中には“歴代の椋山生の中で流行したものや思い出話の紹介”というものが見られたが、単純に学園内の歴史を伝えるだけではなく、当時の女学生たちが生きていた時代の世相や文化を紹介するような資料も今後収集を重ねていくと、より広がりのある常設展示、企画展示を構成していける可能性がある。また、“学園の思い出”という意味では、オーラルヒストリーの形で卒業生（特に高齢者）による語りを記録していくような作業も今後必要かもしれない。

おわりに

以上、筆者が平成29年度、平成30年度の椋山女学園学園研究費助成金（B）の研究助成を受けて実施した椋山歴史文化館の展示改善について報告した。

現状では、研究素材となる資料を製作、設置したという段階で、「研究」という内容には踏み込めていないが、これらの展示改善が具体的にどのような効果をもたらしたのか、次年度以降も引き続き実施していく学生による展示評価を通して確認していきたいと考えている。

現状での学生への聞き取りでは、改善した部分の展示物および体験を通して理解が深まった、これまで知らなかったことが知れた、触れる展示では昔の冊子の紙の質感の違いが感じられ、記事の内容から当時の文化が分かって良かった、などの良い評価も聞いているが、同時に、改善が必要な箇所についても意見を聞いている。

まず、金剛鐘に関する展示では、鐘に関する解説を上下階にわけず一カ所でまとめた方がよい¹¹⁾、金剛鐘の模型を設置するとより理解が深まる、1つの鐘でよいので実物の大きさが分かるような資料が欲しいといった声を聞いている。

次に、体験用制服の展示では、体験用衣装の着方をイラストなどで説明したパネルが設置してあると体験しやすいのではないかという意見がいくつかあった。

また、触れる展示資料については、もっと資料の数（冊数）を増やして欲しいという意見や、たくさんの人が触っても表紙が傷まないようにビニールカバーを掛けるなどの対応が必要ではないか、といった意見が聞かれた。こうした部分も今後手を入れていくことで、改善を図っていききたいと考えている。

椋山歴史文化館は、在学生への自校史教育を担

う重要な施設であるとともに、裁縫雛形のコレクションは近隣の博物館にも貸し出されて展示される機会もあり¹²⁾、2020年に開催される東京オリンピックとの関連では、金メダリスト・前畑秀子に関する資料および情報をメディアに提供するなど、外部との交流も積極的に実施されるようになってきている。

こうした背景には、開館翌年の平成22年から「雛形研究会」によって行われてきた資料整理・研究の作業をはじめ、過去に本学教員によって制作された裁縫雛形や『糸菊』をはじめとするコレクションのデジタルアーカイブ¹³⁾、椋山歴史文化館の展示内容に関する映像作品のYouTubeでの情報発信¹⁴⁾など、歴史文化館スタッフおよび専門委員、また本学園の教職員、同窓生、在学生による様々な取り組みの積み重ねが存在している。特に、雛形コレクションについては、歴史文化館開館10年目となる2019年3月に『椋山女学園 裁縫雛形コレクション』が刊行され、これまで継続して行われてきた研究の成果が結実している。

また、椋山歴史文化館の資料収集にあたっては、同窓生からの寄贈も大きな意味を持っており、今後、貴重な資料が集まることでコレクションは充実し、より内容の深い展示構成・企画が可能となり、利用者への教育効果も高まっていくことが期待される。今後も、学生をはじめ、利用者の声に耳を傾け、将来の歴史文化館の姿を構想しながら、必要な資料の収集や展示計画、展示改善に椋山歴史文化館に関わる一委員として微力ながら関わっていかれたらと思う。また、今回新たに取り入れた展示内容についても、必要な部分についてはさらなる改善を重ねていきたい。

注

- 1) 椋山歴史文化館ホームページ <http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/>（最終アクセス2019/11/22）
- 2) 平成29年度学園研究費助成金（B）「椋山歴史文化館における展示資料の活用とその展示効果に関する研究」（研究代表者：見田隆鑑）、平成30年度学園研究費助成

- 金（B）「相山歴史文化館における体験型展示の導入とその展示効果の検証」（研究代表者：見田隆鑑）。
- 3）授業での展示評価の様子は、相山女学園大学ホームページに掲載されている授業LIVEレポートの中でも紹介されている。<https://sugiyama-u-live.jp/teachings/museum.html>（最終アクセス2019/11/22）
- 4）過去には、正式記念室に展示されている相山今子先生の小物入れを題材としたワークショップ「相女になろう」が本学文化情報学部メディア情報学科の宮下研究室の「卒業研究指導1」の中で実施されている。
- 5）筆者が過去に見た写真資料では、1名の生徒が合掌している姿で写っていた為、1名が演奏、もう1名がその演奏を聞き静かに何かを祈るのかと思っていた。合掌している生徒は、手拍子の途中を撮影されたということである。
- 6）相山女学園「糸菊」編集委員会『糸菊』2018（平成30年版）、pp. 82-87
- 7）この機械は、本来はスーパーマーケットなど商店での商品の宣伝や呼び込みを想定して作られている製品で、センサーが人を感知すると録音した内容がスピーカーから流れる仕組みになっている。また、SDカードに入れた音のデータを流すこともでき、今回はSDカードに金剛鐘の演奏データを入れ、再生している。<https://www.green-house.co.jp/products/gh-epvb/>（最終アクセス2019/11/22）
- 8）金剛鐘の音 http://www.sugiyama-u.ac.jp/junior/assets/audios/a_sugibels.mp3（最終アクセス2019/11/22）
- 9）永和堂楽器店の情報については、古写真なども存在する可能性があり、引き続き情報を探索中である。情報をお持ちの方は、是非相山歴史文化館にご提供いただけたら幸いです。
- 10）「昔の制服を試着！相山歴史文化館」<https://www.youtube.com/watch?v=QMEFr12HZ2Y>（最終アクセス2019/11/22）
- 11）金剛鐘については、歴史展示室にも解説パネルがある為、都合3カ所で解説している形になっている。
- 12）ヤマザキマザック美術館「もっと知りたい名画の世界よそおいの200年」展（2017年4月22日～同年8月27日）
- 13）相山歴史文化館所蔵資料のデジタルアーカイブ<http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/guide02/archives/>（最終アクセス2019/11/22）
- 14）相山歴史文化館映像シリーズ <http://blog.sugiyama-u.ac.jp/mshc/guide02/douga/douga.html>（最終アクセス2019/11/22）

みた・たかあき／文化情報学部准教授